

松浜の発展の礎となった 村山得次郎

村山得次郎の先祖は、1598（慶長3）年、新発田藩主 溝口秀勝^{みぞぐち ひでかつ}とともに大聖寺^{だいしょうじ}（石川県）からやってきたといわれています。岡方地区太子堂^{たいしどう}に居住し、のち1662（寛文2）年に、分家して松ヶ崎浜村に移住したそうです。

1851（嘉永4）年に生まれた得次郎は、若くして家督^{かどく}を継ぎました。1871（明治4）年まで村の名主を務め、その後も松ヶ崎の御用掛^{ごようかけ}や戸長^{こちょう}の役を務めました。明治という新しい時代に、村の人々の生活が豊かになるように力を尽くしたのです。

住宅地の狭かった松浜を開発するため、1873（明治6）年に県の許可を受け、開発に着手しました。新潟の湊元^{つもと}忠次郎^{ちゅうじろう}の協力も得て1873～74（明治6～7）年、阿賀野川の浅洲^{あさす}を埋め立てて住宅地を作りました。この地は新屋敷^{しんやしき}（松浜本町4）と名付けられ、のちに松

ヶ崎浜村役場など公共施設が建つようにもなりました。現在も、本町通り周辺とともに松浜の中心となっています。

いま、松浜市場が開かれるところも新屋敷です。その市場を開設することについても得次郎は力を尽くしました。松浜の人々は、1876（明治9）年、県に2と7のつく日に市を開くことを願い出しました。やがて許可を得て、現在も2・7の市が開かれています。

また、河川交通の要衝^{ようしゅう}だった松浜を、港町として発展させようと計画しました。そのため、江戸時代以来、松ヶ崎堀割^{ほりわり}を港として使用することを禁じた新潟町との契約^{ていばい}を撤廃し、港を開くために尽力しました。しかし、得次郎の願いが実現する前に、1886（明治19）年、36才で亡くなってしまいました。

しかしその後も、得次郎の運動は引き継がれ、1893（明治26）年に衆議院

で、交易港「松ヶ崎浜港」の開港が認められました。それを機に、明治～大正にかけて松浜は木材の輸出入を中心とした交易港として大きく発展しました。また、回船問屋・材木商・製材所や、松浜に集まった人のための銭湯・料理屋・旅館が多くでき、松浜は大いににぎわいました。



村山得次郎君頌徳碑（松浜本町3 松浜稻荷神社境内）
松浜の発展に力を尽くした得次郎を顕彰するため、1938（昭和13）年に有志によって建てられました。